



# 大谷教師塾

## 教員養成ナビゲーター

大谷大学  
教職支援センター

第101号

2012. 9. 28

### 子ども理解 「なぜ？」にこだわって

副センター長 市川 郁子

生徒指導とは「子ども理解」に始まり「子ども理解」に終わると言われています。子どもを理解するためには、まず普段から「子どもを見る」ことです。そして、「なぜ」にこだわって考えることです。

「なぜ、今日は遅刻をしたのだろうか」「なぜ、今日は宿題をこなさなかったのだろうか」「なぜ、今日は表情が違うのだろうか」と、子どもに表れている事象を通して、その背景にまで思いを巡らし、考え、確かめることが、子どもの実態を把握するということであり、そこから子ども理解ができるようになるのです。普段から子どものおかれている状況や子どもの様子を把握していなければ、異なる状況や子どもが発している信号には気付けません。教師は、子どもが発している信号をキャッチできるアンテナを広く、高く巡らし、感度を良好に保っておく必要があります。日常的な子ども理解なくしては子どもへのタイムリーな関わりは不可能であると言っても過言ではありません。子どもを指導するために、「子どもに学ぶ」という姿勢があれば、見えにくいものもきっと見えてくるでしょう。

そして、子どもが発した信号をキャッチしたら、次は対応です。この時、教師の「初めの声かけ」や「初めの動き」が大切になってきます。一つの事例を紹介します。

**自分の思いや考えを日記に書くことが毎日の宿題になっている学級がある。A君は自己表現が苦手で、書くことにも抵抗がある。担任はA君の状況をよく分かった上でこの宿題を課していた。短い日記ではあったが、A君は3日間続けて提出していた。よくがんばっているな…と思いつつ担任は次の日をむかえた。4日目の朝、日記は出ていなかった。担任はA君を呼んだ。**

みなさんなら、こんな時A君に何とどうで

しょう。A君は日記を出していないので当然叱られると思ってうつむき加減でやってきました。

担任は「A君すごいね。3日も続けて日記が書けたじゃないか。」と最初の声かけをしました。担任の最初の声かけはA君のがんばりを認めるものでした。「3日しか出せていないじゃないか。」と言うのか、「3日も続けて出せてすごいね。」と言うのか。叱られる覚悟でやってきたA君でしたが、その声かけを受け、なぜ日記が書けなかったのかその事情を話し始めたということです。

これは、日常的にA君の状況を把握しているからこそできた最初の声かけです。最初の刺激が違えば子どもの反応も変わってきます。なぜ、日記が書けなかったのか、その理由がA君の家庭の事情の中にあつたことを担任は理解できました。その後、たまに提出できない日もありますが、A君の日記は続いているということです。

生徒指導においては、様々な事象を上辺だけで受け止めるのではなく、考えられる複数の視点から事象を捉え、子どもに対応していくことが大切です。子どもが行き詰まっていること、子どもが起こす問題行動と言われるものは生活の中で生じたものです。子どもと日常を共にしている大人が、寄り添い、ぶつかり合い、共感しながら関わっていかなければなりません。子どもに触れる自分の肌触りを大事にし、子どもと接する自己の感性を磨いていきたいものです。

問題行動は子どもの心の叫びです。言葉として発せられなくてもその叫びをしっかり受け止め、子どもが納得できる対応をしていきたいものです。子どもが納得してこそ「指導」です。



#### 目次:

生徒と共に成長する教師	2
我慢・辛抱後の楽しさ	2
将来の自分と子どもたちのために	3
自分の知らなかった世界が見えてきた	3
読書案内1「日本語教室」	4
読書案内2「ハーバード白熱日本史教室」	4



### 積小為大

教職支援センター 教職アドバイザー 馬場 信行

二宮尊徳（金次郎）の像が多くのある学校にあります。その氏の言葉に『積小為大（せきしょうだい）』があります。

「大きなことをしようと思えば、小さなことを怠けずに励まなければならぬ。小さなことの積み上げこそが大きなことを生み出すのだ。」という意味です。

皆さんは、今「教師になる」という夢に向かって進んでいます。大学での学び、自宅での

学習、ボランティア、日々の努力に怠りはありませんか。小さなことの積み上げが、あなたの夢を実現へと導いてくれることでしょうか。

支援センターは、そんなあなたの力になるための場です。ゼヒトここを利用し夢を実現させましょう。





祝  
合格

## 子どもと共に成長する教師を目指して

京都市立西賀茂中学校 英語教諭 岩見 隆恵（いわみ たかえ）  
2007.3 国際文化学科卒業

私はこの4月から念願の新規採用者として勤務し始めました。

卒業後5年は、西賀茂中学校に常勤講師として勤めてきましたがその間、私は英語科の教材研究や生徒指導、吹奏楽部の指導など日々忙しく帰宅時間も遅くなりがちでしたが、とても充実した時間を過ごしました。

しかし、講師1年目の頃は、分からないことが多く、不安に押しつぶされそうになり、落ち込むこともよくありました。そんなとき職場の先輩方や子どもたちに支えられ、乗り越えることができました。

時には厳しく叱咤激励されることもありますが、新米でもベテランでも、生徒の前では一人の教師であるということにはかわりはありません。目の前にいる生徒たちに今の自分が何をできるのかを精一杯考え、積極的にそして丁寧に行動することが大切であると思います。

そしてそのことを咄嗟に考え的確に行動するためには、毎日の生活の中で常に生徒たちと一緒に活動して汗を流し、ともに喜んだり悲しんだりする中でお互いに理解しあい、信頼関係を強めていくことが何よりも大切だと思えます。

教師にとって、教科指導はとても大切であり、専門知識をつけて授業力の向上を目指すことは言うまでもなく大切なことですが、前提に

なるのは徹底的に現場主義を貫くこと、何よりも生徒のことを優先し生徒たちとの信頼関係を強めることです。

私は、毎日の生徒たちとの関わりから多くを学び、常に成長し続けられる教師でありたいと考えています。

教師を目指している皆さんに私が望むことの一つは、学生の中に専門教科のことだけではなく、いろいろな分野に興味を持って知識を増やすことで人間力を身につけておいてほしいということです。もう一つは、何事にも指示をされて初めて動けるのではなく、自分で判断をして的確に行動できるように心掛けてほしいということです。

さらに、教師である前に魅力ある一人の大人として生徒たちの目標になれるようになってほしいと思います。学校現場に出れば、大学で勉強したことを振り返る時間はほとんどないと思ってください。

だからこそ、今あらゆる分野に興味を持ち経験を積み、教師としての基礎的な力を身につけることが大切なのです。

学校は厳しい職場ではありますが、その分やりがいも大きいと思います。ぜひ多くの皆さんが続いてくれることを期待しています。



築き上げたい  
生徒との  
信頼関係

## 我慢・辛抱後の楽しさ

— 私のボランティア体験 —

文学科 第3学年 坂田 篤(さかた あつし)

私は、昨年の9月から京都市の中学校でボランティア活動をしています。

私がお世話になっている中学校は正直に言うと、学力面や生徒指導面などで様々な課題を抱えた学校です。

最初は戸惑うことが多くありました。生徒に暴言を吐かれたり、悪態もつかれたり、また、私を見る生徒の目があたかも「つりあがっている」ようにも思えました。

しかし、その学校には、ありがたいことに、私の中学生時代の部活動の恩師がおられたので何度もフォローをしてくださいました。

そんな中で、私なりの努力を重ね、1ヶ月、2ヶ月経過すると、生徒の方から話しかけてくれるようになっていたり、廊下で私のあだ名が飛び交っていたりするようになり徐々に私は生徒との距離やコミュニケーションがとれるようになってきました。

特に、今年度になると学年の先生から授業中の廊下パトロールなどの仕事を任されたり、野

球部でも顧問の先生のご指導のもと、一人で担当させていただけることが増えてきました。野球部員は決して多い人数ではありませんが、仲の良いチームなので今後の成長を楽しみにしています。勝てるチームになるための手助けが少しでもできたらと思っています。厳しいですが、やり甲斐を感じながら日々活動をしています。

私がこの京都市立の中学校で学んだことをまず挙げるとしたら、「自分の目線だけで物事を考えず、常に生徒目線でも考えることによって生徒との関係や信頼が生まれる」ということです。

最初は暴言、悪態を受けていた私ですが、日に日に生徒との関係が良くなっていくことは自分でもわかるほどでした。「仲良くなる」という言い方は不適切かもしれませんが、互いに良い「コミュニケーション」をとれるようになり、私自身も楽しい中学校ボランティア生活になりました。

## 将来の自分と子どもたちのために

— 模索・手ごたえ・楽しさ —

教育・心理学科 第2学年 盛田 樹 (もりた みき)



私の将来の夢は、小学校の先生になることです。この夢の実現に向け1年生の頃は、学童保育のバイトをして、子どもたちとの関わりについて学んできました。当然のように、最初はどのように関わっていけばよいかわかりませんでした。日が経つうちに、個々のこどもの特徴を充分理解しながら適切に対応することの大切さがわかってきました。この学童保育での経験は私にとって大きな収穫になりました。

さらに経験を積みたいと思い、2年生からは、週に1度の小学校でのボランティアを始めました。ボランティアをして、改めて学校の様子を知る中で、教師の存在がどれだけ子どもに影響を与えるのかということ学びました。

いろいろな教室を回っていると、学級担任によってクラスの雰囲気が違うのです。今大学で学んでいる個性的で特徴的なクラスづくりはこういうことなのだなど実感しました。ボランティアとして私を取り組んでいることは、教室でみんなと一緒に授業を受けられない児童への支援です。その子の様子は毎週異なっているので、今週はどんな感じなのか、どのように関わればよいのかなど

模索の連続です。でもボランティアとして学校に行くことの手ごたえは大きなものがあり、楽しささえ感じています。

学童保育のバイトや小学校でのボランティア活動を通して改めて感じることは、自分は子どもが本当に好きなのだということでした。先生たちに失礼なことと言う子も実際はとても子どもらしいかわいい子だと思います。こちらが子どもたちと同じ目線で真剣に向き合っていれば、子どももしっかりと返してくれます。それがとてもうれしくて、最近ではますます子どもが好きになってきました。

私の夢である小学校の先生となり、子どもたちと楽しい学校生活が送れるよう、今は経験を積み知識をつけていきたいと思っています。自分のためだけでなく、今関わっている子ども、将来自分と関わる子どものために、バイトやボランティアの立場だからといって気を抜かず、一生懸命に取り組んでいきたいと思っています。



学童保育のバイト

×

小学校での  
ボランティア活動

## 自分の知らなかった世界が見えてきた

文学科 第1学年 水野 恵 (みずの めぐみ)



私は8月6日(月)の国立京都国際会館で開かれた「未来づくり教育フォーラムin京都」に参加しました。

このフォーラムでは午前中に全体会があり、午後には分科会が行われました。私は午後、第5分科会の「LD等支援の必要な子どもたちへのかかわり」に参加しました。

この分科会では、大阪教育大学名誉教授 竹田 契一先生の講演と現職の先生方による寸劇によって発達障害の子どもへの対応が主な内容でした。私たちが教師になったとき、子どもたちにどのようにかかわっていくべきなのかについて多くのことを学びました。

この分科会で一番印象的だったのは「児童と担任の心の絆」という言葉です。この言葉は子どもが「先生大好き」という気持ちをもつなど、信頼関係を築くことの大切さを表しています。信頼関係を築くためには一つ一つのトラブルが起こった原因をその都度探り、丁寧に対応していくことが大切です。何よりも日頃から子どもと教師の信頼関係を着実に築いていくことが土台です。

この分科会を通して、教師の指導の言葉や説明の仕方がいかに大切かを知ることができました。

例えば、自閉症スペクトラム障害児に対しては「お風呂みてきて」という言葉ではわかりません。字義通りに受けとめてしまい、ただお風呂場をみただけに終わります。また、図画工作科の授業で「この色で塗ってもいい？」と子どもがたずねたとき、教師が「何色でもいいよ」と答えても混乱し理解できません。子どもの障害を踏まえた問いかけや説明の仕方を十分に考えなければなりません。

このフォーラムには多くの先生や保護者が参加されていたように思います。会場を埋め尽くすほどの参加者の多さと、教育に対しての関心の高さや熱心さに圧倒されました。

このフォーラムに参加して、自分の知らなかった世界を見ることができました。教師になるため、多くのことを学ぶことができました。またこのような機会があれば積極的に参加しようと思っています。



未来づくり  
教育フォーラム  
in  
京都

8月6日(月)  
国立京都国際会館

★  
読書  
案内

## 「日本語教室」

井上ひさし 新潮新書

文学科 第1学年

玉岡龍之介（たまおか りゅうのすけ）

皆さんは日本語や母語、母国語について深く考えたことはありますか？実際のところ、深く考えたことがあるという人はあまりいないのではないかと思います。

私は小さいころから本を読むのが好きで国語の勉強も大好きでした。今ではいつか国語の教師として母校で働き、国語の楽しさを伝えたいという夢があります。

しかし、最近さまざまな場面で日本語が乱れてきていると言われるようになりました。

この本の著者である井上ひさしは日本語の乱れの原因を「どういう時に英語を使うか、どういう時に英語を排除するべきなのか、というような見境がつかなくなっていることが問題だ」といいます。本書では日本語が最近どのように変化しているのか、これからの日本語はどうあるべきなのかについて、深く、しかも楽しく面白く読めるようになっています。

特にオススメなのは第一講の日本語は今どうなっているのかというところが面白いです。自分が知らなかった日本語の意外な成り立ちや今日の日本社会におけるグローバル化による英語重視に対する警告など国語の教師を目指す人にはぜひ読んで欲しい言語についての話が満載です。



また、第一講に限らず、第二講の日本語の成り立ちについてや、第三講の日本語の発声の表現についてなど日本語の重要性だけでなく、その他の様々な切り口から日本語というものを知ることができます。

### アドバイザーが進める図書一冊

## 「ハーバード 白熱日本史教室」

北川智子 新潮新書

私は「教員採用選考試験対策面接論文セミナー」（8月3日と9月19日に実施）の参加者の20余名にこの本を熱心に紹介しました。

私がこの本を通じて本学の諸君に伝えたかったのは、若き著者の北川智子さんは、今、日本人に求められる「世界人材」（グローバルな人材）の一人である…との思いに加え、

- 1) 私が憧れる「ハーバード大学」の学生の奮闘ぶりを諸君にゼヒトモ、知ってもらいたい…
- 2) 「日本の若者が内向き」と言われる今、32歳の著者の奮闘ぶりを諸君と共有したい…
- 3) 本書から、人は「その気」で努力した分野で光れば、必ず「ふさわしい職」が得られる、と…

私は著者の実際の「日本史の授業」の良しあし(他の書評)には関知しませんが本書を読む限り英語を使いこなし高い評価を学生から受ける話は「痛快」です。

大学卒業後の彼女の10年間の活動は世界を舞台に抜群な成果を収めたと思います。

今、国連機関における日本人職員は専門職3万人のうち770人とされていますが、現状は65人に過ぎないという記事もあります。そんな北川さんは「Lady Samurai」のような世界人材としての活躍で学生を魅了します。

私は京都駅で本書を求め、新快速電車の席で読みましたが「英語冒険物語」の主人公の北川智子さんのような「世界の人材」が大谷大学から誕生すればと願っています。

## 大健闘！ 教育・心理学科 一期生

- 小学校 22名
  - 中学校 1名
  - 高等学校 1名
- (文学科・大学院生含む)

2013年度公立学校教員採用選考試験  
1次試験合格者数  
(2013年度卒業予定者)

そして、この『日本語教室』を読んでいくと少しずつあることに気づかされます。それは日本人であるはずの自分がひょっとして日本語というものを十分知らないのではないかということです。人にとって母語とは何なのか、国語の大切さや魅力は何なのか。

私自身この本を読むと母語や母国語などについて考えさせられます。誰にとっても言葉について深く考えさせられる一冊です。



私はこの本の好意的な評判を教育雑誌でまず、読みましたがAmazonの書評で改めて、本書の多様な読み方、批評や読後感があることを知りました。

君たちも、様々な読書を通じ、各種の書評の併読で君自身の「本の選び方・読み方」を知り、生きる力の「考える足場」を不断に鍛えてほしいと強く思います。 本体680円。

教職支援センター

教職アドバイザー 西寺 正